

# ベケット、無目的の存在

堀 田 敏 幸

## 一、無目的

ベケットは小説の冒頭から常識はずれなことを語ることによって、読者に一抹の困惑をもたらそうとする。衝撃的な場面を最初に描くことで、人間の生存を根底から問うという彼の文学意図を、強行突破させているようにも受け取れる。小説『ワット』（一九五三年）は、召使いとして雇われたワットが、仙人のように幽居した生活をしている主人の生き様を体験することによって、ついには精神病院に入院することになるという荒筋である。この作品の冒頭で、ハケットという人物は道路に置かれたベンチについて、こう判断する。「彼はその物が自分のものでないことは知っているが、しかし、彼としては自分のものなのだと考えた。自分のものではないと分かったのは、それが彼の気に入っているからだ<sup>1)</sup>」。ここでベンチというのは公共のものであることを、ハケットは知っている。しかしこの場面では、ベンチは他人によって使用されていたので、彼は早く空席になることを願っている。こうした時に、ベンチが個人所有のものかどうか判断するのに、「気に入っている」ことを理由にするだろうか。この文脈では、人が気に入って愛好する物はそれを熟知しているので、正しい判断が可能だと解釈すべきなのであろうが、反対に気に入らない物であれば、自分の所有物かどうかも判別しかねるといえるのは、認識力を幾分喪失した人間の判断と言えるのではないか。こういう理性を欠いた人物を指標として冒頭に登場させることは、ベケット文学がすでにして社会的人間性の破壊しかかった世界を語ろうとしている証左ではあろう。

それでは、小説の主人公ワットならどうであろうか。彼の性格も副人物であるハケットに通じるところがある。ワットの作品への登場は、ハケットが問題にしたベンチのすぐ前にある鉄

道駅から、汽車に乗ろうとする場面においてである。ここで彼は数人の通行人によって立ち話の材料にされる。赤っ鼻をしているとか、片方の長靴を買う金を貸してやったとか、ミルクしか飲まないとか、住所が不定だとか、そういった人物評である。そしてミルク缶を運んでいた赤帽とぶつかった後、彼はいよいよ汽車に乗ることになった。「機関車は蒸気をはきあげて、長く連なった車両を駅から引き出そうとしていたが、ワットは機関車に背を向けて座った。目的地に背を向けることが、すでに前々から彼の好みであったのだ<sup>2)</sup>」。進行方向と逆向きに座ることに何も問題はない。飛び去っていく風景を眺めるために後ろ向きに座ることは、よく子供の取る姿勢である。ここで問題なのは、「目的地に背を向けることが彼の好みである」、つまりこの姿勢が単に車両内でのことに限られるのか、それとも生活全般に関してワットはこの態度を好んでいるのか、という点にある。どちらにも解釈できようが、作者がわざわざここで彼の以前からの嗜好であったことを断っている点から判断すると、後者の広い意味に解釈することが相応しいであろう。

ワットは目的地に背を向ける、つまり彼は何かの目的をもって行動することを好まない性格の人物であると、作者は暗にほのめかしている。ベケットは小説を構想するに当たって、登場人物の人生の捉え方に特徴的な視点を与える作家である。通常、多くの作家は人生での様々な出来事や事件を体験させた後に、人物の人生観を形成していく。ある不幸が幾つか続いて起こる、すると彼は人生とは生きるに値しないものだという人生観を獲得する。またある一つ不幸が次の幸運をもたらしたとなると、人生とは一つの状況だけでは判断できないと、楽観的な人生観を身に付ける。このように人生観というものは、人物の人生経験があって、そこから帰納的に形成されるものである。ところがベケットでは、この人生体験というプロセスを順次語っていくことを拒否する。彼は自作の登場人物に最初から強い人生観を与えて、その主義にのっとって行動様式を決定していく。それはワットが汽車の乗り方で端的に示しているように、「目的地に背を向ける」生き方、つまり人間の幸福に向かって努力するという生き方に対し、反旗をひるがえすという衝撃的な人生観であるだろう。この人生観を、ベケットの主人公たちは先天的に与えられている。

汽車の目的地に背を向けて座ることが、人生の目的に背を向けることを意味するのであれば、これは何という虚無的な人生観であることだろうか。ところがベケットでは、これが一方的な敗北にゆだねられていないところが不思議という他ない。ワットの場合、片方の長靴を買う金もないほどの赤貧であり、住所も定住家屋を持たない浮浪者のような存在であるにもかかわらず、彼はこのことに絶望することなく人生を過ごす。例えば、ある時前を歩くワットの帽子を奇妙に思った婦人が、彼に向かって石を投げた。これがワットの帽子に見事命中した。ところが彼はこの不運を、首に石が当たらなかったことから「幸運な命拾い<sup>3)</sup>」と判断し、怒り

を表わそうとしない。人生に対するユーモアの何と旺盛なことであろうか。経済的に貧しくとも、ワットは人生の不幸の中に全面的に浸かってしまうことはなく、諧謔の精神をもって人生に余裕を生みだしている。

人生に目的を持たない人間はユーモアの精神を持つ。しかし、ユーモアだけで人生の苦悩をかわせるものではないことは、誰にも明白であろう。ワットはユーモア以上のものを武器にして、人生に立ち向かう。それはユーモアに先立つ精神、つまり人生に目的を持たないという彼の人生観である。先にワットが汽車に乗った目的地はどこかといえば、それは召使いとして雇われることになったノット氏の自宅である。彼はここで住み込みの労働に従事することになるが、彼の行動を小説中で語るのは作者ではなく、ワットの前任者アルセーヌである。彼はワットに関して、こう評価する。

この人生の全てのあいだ、表面的な無気力の苦しみと面白みのない仕事の恐ろしさの間を揺れ動いて、彼はついに頑固にも、何もしないことが最高の価値と意味を持つ行為であるという状況に立ち至ったのです。<sup>4)</sup>

「何もしないことが最高の価値と意味を持つ」、この言葉の指示するところは、人生において目的を作らないということであろう。目的を持てば、人はそれに向かって努力を積まなければならない。なぜなら、目的とは自ら自発的に設定したものであり、人生の幸福を意味しているからである。しかしながら、この幸福とは何かを一旦糾問しだすと、その実体を正しく把握することは困難をきわめる。裕福になるという目的のためには、人は働かねばならない。働くことと裕福になることは等価なのか。働けば人は時間を失うばかりでなく、その間の生の意義も同時に失う。働くことによって収入を得、それによって生活に必要なものを購入するとしても、労働自体の苦悩までも償うことができるのか。一週間のうち六日間を働いて、残り一日を神への祈りに捧げたとして、その六日間の労働は価値あるものとして復興するのか。ベケットはこれに強く疑問を抱く。

男と女の愛情が問題となると、ベケットは労働の価値をことのほか軽視する。「生活のために働くことで、彼は生の実質を失うであろう<sup>5)</sup>」。これは小説『マーフィー』（一九三八年）の中で、無職のマーフィーが恋人セリアに向かって言う予言の言葉である。マーフィーは慈善団体のわずかな喜捨で暮らしている。この資金で二人の結婚生活を営むには無理があると分かりながら、彼は恋人にも労働を中止するよう要望する。しかし、セリアはマーフィーが働かなければ、彼女の方が元の仕事に復帰すると言う。彼女の仕事というのは娼婦であって、結婚しようとする者にとっては望ましい職業ではないであろう。勿論、ここでマーフィーはこの職種

に対して反対しているだけでなく、何であろうと労働自体に対して嫌悪を表明している。労働は二人の愛情を破壊する。愛情を維持するために労働による資金が必要であることは、愛の冒瀆と映る。しかし、最終的にマーフィーはセリアと離れて、精神病院の管理人として働く道を選ぶ。彼の最後はガス漏れの火傷<sup>やけど</sup>からくるショック死となって、予言通りセリアとの愛情生活を取り戻すことはついに出来なかった。

労働を拒否する、これはベケット文学の根幹をなす思想であろう。ただし、それは単に収入の有無による「経済的な問題」ではないと、マーフィーは主張する。それには他に「人生観上のさまざまな理由がある<sup>6)</sup>」と述べて、浮浪への正当性を強調している。それでは、ベケットの言う「人生観上の理由」とは何か。それはマーフィーがセリアに語った言葉、「生活のために働くことで、彼は生の実質を失うであろう」という先刻の予言に他ならない。しかし、これでは論理が堂々巡りをしてしまうので、それではなぜ労働をすると、生の実質が損なわれるのであろうか。それは労働が人間の本質にとって重要ではないと、ベケットが考えるからである。労働は原罪にも等しい罰として人間に課されたものであるから、これを行っていたのでは本来の人間の姿は見えてこない、考えるのであろうか。労働は強制なのか、それとも生物である人間が生きていくための必然であるのか。労働は人間が機械の一部となって工場で働く犠牲なのか、それともより安楽な生活のための自主的な手段なのか。労働を悪と認識するのか、それとも善と受け取るのか。この問題は個人、国民、宗教、道徳それぞれの思想によって二分されるところであろうが、とにかくベケットでは、労働は人間性の犠牲であって、悪の部類に属するとする思考が強烈である。

労働が悪だと考えるだけでは、ベケットの人生観は終止符を打たない。この作家は人間の生存自体に価値がないということまで、思考を進めようとする。

しかし、この私というか俺というか、この私の生存の断片的な物語をいくら続けても無駄である。というのも私の考えでは、それには意味がないからだ。<sup>7)</sup>

「生存には意味がない」と考える人間が、働こうとするのであろうか。働いたところで、生きることに対して何の重大な意味が加わるというのであろうか。むしろ働くことによって、ますます生存の意味が悪化していくだけではないのか。労働は生きることに対する存在理由を与えはしない。働くことで収入を得、それによって生きる糧の食料や住居を確保するとしても、生きること自体に意味付けが為されなければ、何も食べない方が得策かもしれない。生存の意味を見出せないと言うモロイであるなら、パンを拒絶して、むしろ石をしゃぶるという妙案を考え出すであろう。石の食事なら、人間の生存にとって何ら栄養になりはしない。ただしモロイ

なら、これを口にすることで精神的な安らぎを得、一時的に空腹感を忘れることは可能であろうが。

ベケットの『マーフィー』が出版された一九三八年に、人間の実存とは何かをテーマにしたサルトルの『嘔吐』が同じく刊行された。この中で主人公のロカンタンは、「人が生活しているとき、何事も起こりはしない。それは際限のない単調な足し算だ<sup>8)</sup>」と語り、毎日の繰り返しにすぎない日常生活を<sup>や</sup>擲<sup>ゆ</sup>した。彼は日々の単調な生活には「冒険」が欠如していると言う。何か新しく、まるで書物の中で語られるように始まる必要があるという訳であるが、モロイの言う「生存の断片的な物語には意味がない」という言葉と比べてみると、サルトルは生きること自体を否定するほどには、過激でないことが分かるだろう。彼は存在を憎悪することが、かえって存在の深みを増すと考えている。ところがベケットでは、人間の思考の中で存在を一時的に否定するという抽象的な段階で終らず、実生活において、また彼の肉体的欠陥において、生存の価値を否定してみせる。彼の作中人物たちは両足に硬直をきたし、松葉杖を使い、記憶喪失症にかかっている。彼らは肉体の移動機能を捨てて、精神の中へ逃げ込もうとする。ここでは生存の条件から解放された自由な存在が、闊歩しているからである。しかし、精神の中だけで生き続けられるものではない。

結局、肉体をまとして生きるにしる、精神の中で自在に生きるにしる、人が生存している以上は、生存することの有意味がなければならぬ。しかしベケットでは、この生存の意味を見出すことにはなほだ困難が伴う。寝たきりの状態で物語を書こうとする小説『マロウンは死ぬ』(一九五一年)の主人公マロウンは、生存の意義をこう考える。「生きる、といっても、それが何を意味しているのか、私には分かっていない。生きようと努めてみたものの、何を目標に努力したのか分かっていなかったのだ<sup>9)</sup>」。人は生きています。しかし、その目標が分からない。人は生きがいがなくなると憂鬱に落ち入り、人生を呪おうとする気持ちに捕われる。どんなに物質的に恵まれていようとも、またどんなに肉体的に元気であろうとも、こうした物的な価値はすでに獲得されてしまったものであり、新たな努力の対象となり得ない。人は未来に向かって、そして現在の状態においてさえ、何かの目標、何かの生きがいを気持ちの中で保持しなければ、結局のところ虚無へと突き進んでいくことになる。しかしベケットの主人公たちは、時にこの虚無の淵に落ちいることがあるとしても、こうした人間の苦渋を切り捨てて、「何もしないことが最高の価値を持つ」と言う。

人間の生存には意味があるのか、ないのか。ベケットは意味がないと言う。一九〇六年生まれのベケットは、十三才の時にイギリスからのアイルランド独立戦争を経験し、第二次世界大戦ではすでに移住していたフランスで、外国人としてドイツのナチ政権から身を守らなければならなかった。彼はここで地下組織のレジスタンスに加わったが、ユダヤ人の仲間を失うこと

となった。パリを脱出してからは、アヴィニョン近くのルシヨン村で潜伏生活を強いられた。戦争の終結時にはノルマンディの町サン・ローで、通訳として赤十字の野戦病院で働いた。彼はここで戦争の爆撃による負傷者、治療の行きとどかぬ病人、食糧の不足した貧困などの悲惨な状況を目撃した。こうした惨状を体験した者が、人間の生存に希望を持てるかどうか。ベケットの戦争体験は、彼の文学に確かに影響を与えているであろう。彼の『ワット』は、南仏での逃亡生活中に大半が執筆されていた。しかし、『マーフィー』や『並には勝る女たちの夢』などはすでにこの戦争以前に書かれていて、これらの作品にも戦後の『ワット』や『ゴドーを待ちながら』と同様の人生観が表明されているのである。

ワットの好みは目的地に背を向けて座ることであった。彼は汽車に乗って新しい職場に向かおうとしているのに、なぜその職場の方に関心を集中しないのか。仕事内容が気に入っていないために、意に反して働くことになったのであろうか。彼は金銭に無頓着で、いわば浮浪者のような生活に甘んじている。だから、こういう人間の常として、仕事により生活が拘束されることを嫌うのは確かであろう。しかしワットが目的地に背を向けるのは、単に目的地を避けたいという気持ちからだけではない。彼は性格的に、何か目的を持って実行すること自体に嫌悪を覚えるのである。彼は、「何もしないことが最高の価値を持つ」という人生観のもとに生きている。こう習慣的に考える人間が何かを行うにせよ、強い目的意識を抱いて実行することは有り得ない。勤勉な人間なら、世の中にはこのような気楽な種族がいると、分類付けをするであろう。他人の言動を気にかけず、自分の不運もことさら問題視せず、我が思いのままに現状をやり過ぎていく人間である。ワットはこうした人間の一人ではあるだろう。ベケットはこうした人間を強烈な諧謔を交えて、小説や劇作品に描いた。ワットはノット氏という人物の住む屋敷へ、召使いとして働きに行く。ここで何を体験することになるのか。労働は生の実質を失わせると説くベケットが、ノット氏邸で働くことになるワットに、どのような実質を与えることができるのか。それは無目的な存在として人生を生きるという人間の姿である。無目的な人物には、人間の社会性から解放された広大な放浪の自由が宿っているであろう。

来るとはいつても、私たちが来るのではない、存在するとはいつても、私たちが存在するのではない、出て行くとはいつても、私たちが出て行くのではない。だから、これらのことは無目的に来ること、存在すること、出て行くことに他ならないではありませんか。<sup>10)</sup>

ここでワットの前任者アルセーヌは、彼自身がノット邸の仕事を辞職して、次に後任者のワットが赴任するのは、何かの明確な「目的」があって、召使いの交替が行われるのではないことを言おうとしている。アルセーヌはある一定の期間、ノット氏の屋敷で働いた。彼がそこ

を去るのは十分に給金の貯えが出来たからでもなければ、年齢的に任務が苦痛になったからでもない。彼はある期間、一定の場所で働いた。それだけで、彼は十分に人間存在の意義を果たした。だから、次にはここを去ることが宿命である。そして、彼が赴任した時と同じように、別の人物がやって来るであろう。この交替には、何の思惑が働いている訳でもない。来訪した人間はすべからず退去する。これが地上の必然であって、そこに何か別の意図が作用している訳ではない。従って、ノット邸への来訪と退去の間におけるそこでの生存にも、何かの目的が介入することは有り得ないことになる。

生存することは無目的に在ることだ。労働のために来訪したというのに、なぜそれが無目的と呼べるのであろうか。アルセーヌは、そしてワットは確かに召使いとして働くという目的のために、ノット氏邸にやって来た。しかし、ここで彼らはノット氏のために働いたにもかかわらず、ノット氏という不可解な人物の神秘性によって、人間性の謎に直面する。ノット氏は、様々な材料を煮込んだ雑炊のようなものを食事として生活している。しかし、それは単に命をつなぐ程度の摂取量で、人間の限界に達している。彼は召使いの前にさえ姿を公然と現わさないし、会話もしない。彼はミイラになろうとする者が、水しか取らないような状況を作り出している。彼に生存の目的があるのか。その彼に奉仕する者に、その奉仕が確かな目的として意識できるであろうか。主人の生存に目的がないように、その召使いの労働にも目的が曖昧なままとなる。この無目的に、彼らは恐怖を抱くであろうか。主人が望みを欠いているように、彼らもまたこの世に何かを期待しない。

生きることに期待をかけない人間は、目的もなく存在することを彼らの自由の証と捉える。人生への無目的とは生活の敗北どころか、自由気ままな生存の謳歌として歓迎の声を上げるであろう。無目的な存在、それは人間生活への執着を断ち切ったところの、自在なる生き方である。

## 二、ベラックワの怠惰

ベケットの主人公マーフィーやワットのように、何もせず労働を忌避するような人物の典型は、これらの作品以前の小説『並には勝る女たちの夢』（一九九二年）や『蹴り損の棘もうけ』（一九三四年）にすでに表れている。この二作品はベケットが彼の小説技法を確立するために模索している時期の作品であって、その登場人物像を彼の実生活の知人から得ている。そのため最初に出版された『蹴り損の棘もうけ』は、モデルの人物から訴訟を起さされることになったし、また『並には勝る女たちの夢』の方も一応出版社探しを行ったものの失敗すると、ベケットはこの作品の刊行を彼の没後にしか認めなかったために、一九三二年に執筆されたにも

かかわらず、半世紀以上たった一九九二年にやっと日の目を見ることになった。こういう経緯をたどった作品であるが、ベケットは後の主要人物の特徴をすでにここで描いている。

それはベラックワという人物である。この主人公はダンテの『神曲』、「煉獄篇」の第四歌に登場する怠け者の代表者のような人物で、彼は生存中に罪の懺悔をしなかったため、煉獄前域で待たなければならない。しかも、その時間たるや彼の生前と同じ期間であって、彼は両手で膝をかかえ、頭を深く垂らした姿勢で時を待つ。ベラックワはこの間何もせず、罪を反省することもなく、ただ無為に過ごすことを本領とするのである。ベケットはこうしたダンテの『神曲』の人物像を借りてきて、しかも彼の作品の主人公に同一名を使用することさえ躊躇しない。ベケットという作家は初めから著名なダンテの作中人物名を借りることで、人生への反逆精神を何と大胆に表明しようとするのか。いや反対に、ベラックワの名を借用することで、反逆精神の基盤となるものを、既得特権とする手段に打って出たと理解すべきであろうか。

『並には勝る女たちの夢』は冒頭から、ダンテによって描かれたベラックワの特徴的な姿で始まる。それは、「ベラックワは霧雨のなか、カーライル埠頭の先端にある杭の上に座っていた<sup>11)</sup>」という文で、このとき彼はスメラルディーナ＝リーマという娘に恋をしていた。ところが、彼女はピアノの勉強のためにウィーンへ旅立っていった。ベラックワはこの別れに対し、両手を膝におき、頭をその手の上に落として、涙を流そうとしていたのである。ところが、彼はこの別れを残念に思うどころか歓迎すべきものとし、涙も悲しみの涙というより、彼を恋から解放するための区切りになる儀礼と考えていた。一体、ベラックワの体を折り曲げた姿勢は苦悩の表れなのか、それとも次の取るべき手段への足掛かりなのか。このように表面的な行為に対して別の意味内容を与えようとする思考は、彼の反逆精神を語っていると言えるであろう。ベケットの描くベラックワは、常識から外れた型破りな人間性を打ち出している。ベラックワは現実世界をこう認識する。

現実の存在はペストのように有害なものだった。それは想像力に活躍の場を与えないからである。[...] 最良の音楽は数小節で聞こえなくなる音楽であるし、目の前で見えなくなる対象物こそが、いわば最高にして最良のものなのだと強く宣言し、かつ主張するのだ。<sup>12)</sup>

「目の前で見えなくなる対象物こそが最高」と考えるベラックワは、恋人に関しても同様の反応を示し、遠くの町へ去っていくスメラルディーナ＝リーマを歓迎する。ベラックワにとって現実に存在するものは、彼の「想像力」に対する一時的な糸口にすぎず、本質的なものは彼の頭脳の中にこそ生まれる。なぜ彼は、それ程にまで現実世界を忌避するのであろうか。現実には彼が満足に思えるだけの価値あるものがないと、考えるのであろうか。それなら初めか



ら、現実世界の存在である女性を恋人にしなければよいと推測されるが、しかしそう単純に割り切れるものではないのが人間である。すでに生命を保持し、社会的規範の中で生活し、人間的欲望を多少なりとも抱いているのが人間存在である以上、全ての現実を一挙に放擲<sup>ほうてき</sup>することも叶わぬのが実際のところであろう。全てを一挙に破壊することが不可能とすれば、残された手段は徐々にその変革を実現すること以外には見つからぬであろう。ベラックワは「〈物事ヲシナイ能力〉は男であろうと女であろうと、非常に貴重な宝物であった<sup>13)</sup>」と述べて、先にワットに関して「何もしないことが最高の価値」とした判断と同一の認識に立つのである。

「物事ヲシナイ能力」は一体、何に役立つのか。勿論、まったく何の役にも立たないものを、「能力」であり「価値」と呼ぶことは矛盾している。何かに役立つゆえに能力なのであるから、現実世界において無益であるとしても、別の世界においては有益となるはずである。それはベラックワが述べたように、何もしない無為というものは、「想像力」の手助けになることを意味している。体を折り曲げて膝をかかえ込んでいるベラックワも、ロッキング・チェアに体を縛りつけて身動き出来なくさせているマーフィーも、肉体的に無為に過ごすことで、精神が飛躍することを自覚している。勿論、肉体を活動させながらも、また活力ある健康体で机に向かう場合でも、十分に想像力を駆使することが可能である。しかし、あえて歩行不可能な肉体的条件を選択するのは、健全な肉体では理解できない世界がこの現実世界の向こうに存在していることを、立証するためである。肉体の健全な人間がこの現世の価値観、すなわち健康を保ち、食欲を満たし、富を築き、社会的名誉を得、平和のもとに安らぐという欲求から遠ざかることは不可能に近い。一時的に病人になるとしても、その欲求は健康体への願望に終る。こうした現世の価値観を超越した者だけが、新しい価値観を手中に収められるのである。

ベラックワの希求するものは何か。彼は、「現実の存在はペストのように有害だ」と言う。その理由は、実在のものは想像力を弱めるからであるという訳だが、ここで「現実の存在」の中に、彼自身も含まれることを忘れてはなるまい。想像力を働かせる当の人間というものもこの実在の人物である以上、作者のベケットはこの人物を日常性から切り離された不具者の地位におとしめて、物語を構成した。足が悪く、歩行を禁じられた人物という設定である。マーフィーは体を椅子に縛りつけ、ワットは体と足の運び方がちぐはぐであり、後ろ向きに歩きもする。モロイもマロウンも松葉杖がないと歩けない。こうして移動を禁じられた人物は、現実の健全な存在者からは実生活を逸脱した者と見なされ、ベケットの言う「ペストのように有害」な人物であることを免除された。それでは、ベラックワはどうであろうか。彼は肉体に問題がないにしても、彼の原型となるダンテの『神曲』中のベラックワなる人物が罪を改悛<sup>かいしゆん</sup>しなかった罰として、煉獄前域で待機させられることになった。彼は体を折り曲げて座りこんでいる。そして『並には勝る女たちの夢』のベラックワも、ダンテの人物を踏襲してこの姿勢を

取る。一体、ベケットは彼の作中人物を、どこまで現実の生存者に相応しくない姿に持って行くようにするのか。

真のベラックワというものは存在しないし、またそのような人物など実際にはいないことが望ましい。確実に言えることは、彼自身の判断によると、無関心と怠惰と無私無欲のぬかるみの中で、彼自身と隣人のアイデンティティから解放されることの方が、他の唯一の選択肢である放浪という哀れな大失敗よりも、彼の呪われた気質には相応しいということだけである。<sup>14)</sup>

想像の世界に新天地を見出そうとするその人物自身は、現実世界の人間である。いくら想像の中に喜びを求めようと、想像力の作用している時間には限りがある。想像行為から覚めたとき、現実世界になお現前と取り残されているその人物とは、一体何者であるのか。その者は空想の中で、自由奔放に活躍した英雄ではなかったのか。空想の世界も睡眠時に誰もが見る夢と大差がない、日常的な現象でしかなかったのか。夢に見る分身も想像力の中で生み出した自画像も、現実の生身の変形であって、夢から、そして想像から覚めてしまえば、残された人物とは社会的な拘束の中に再び捕えられてしまう、平凡な労働者でしかないのか。

ベケットは想像力を働かせる人物を、この現実世界から逃避させようとする。想像力の行使者ベラックワ自身について、「真のベラックワというものは存在しない」と作者は断言する。肉体を備えたベラックワなる人物は、歴然と存在している。しかし、彼は現実世界に「無関心」であり、労働を拒否した「怠惰」な人間であり、そして生活することに「無私無欲」な態度を貫き通そうとする。現実世界から、そして自分自身から超然としている人間にとって、その人物の核となるべき自我とは何であろうか。自分自身から自分の社会的人格を剥奪している人間が、自己を規定しようとするとき、彼の自我なるものはどのように成立するのであろうか。彼の人間存在としてのアイデンティティは、崩壊するに任せられるのであろう。ベラックワは、「アイデンティティから解放される」ことを好むと言う。彼は自分自身であることに嫌悪を覚える。なぜなら、彼は想像の世界で他者であることに、十分な満足感を抱くからである。自分でない他者が想像の世界にいる。そして自分というものはその他者自身であって、その他者こそが本来の自分の姿に他ならない。こう考えることは、ベラックワに矛盾を引き起こさない。なぜなら、肉体をまとったベラックワは現実生活において、生活する欲望を放棄した何者でもない人間だからである。

自分自身のアイデンティティを持たない。これは想像の中で他者の生を生きることで多重人格となるために、本人固有の自我を持たなくなるということに基因している。そして想像者自

身もこの現世で生きる欲望を軽視していることから、彼の社会的自我も形成されることがない。彼はただうずくまって、ひたすら瞑想にひたることだけに徹するのであろうか。小説中のベラックワは時にこうした座禅僧のような姿勢を取ることがあるとしても、決して常住そうしている訳ではない。彼は物語の主人公として、大いに動き回っている。しかも彼の行動に対し、作者は突拍子もない振る舞いや突然の場面転換を引き起こして、読者を混乱の中へ突き落とそうとしているように見える。なぜベラックワの行動は脈絡を欠き、飛躍するのか。『並には勝る女たちの夢』と同様に、ベラックワはベケットの最初に出版された小説『蹴り損の棘もうけ』という風変わりな題名の作品にも、主人公として登場する。この中で、作者は言う。

彼が好んで考えたことは、ただ単にやたらと動き回ること、彼の言う復讐の三女神から逃げおおせらるだろうということだった。[...] どこから来てどこへ行くかということは、問題にもならない。単に起き上がって出かけるという動作だけで、彼には満足のいくものだった。<sup>15)</sup>

ベラックワは「復讐の三女神」から逃げなければならない。何ゆえに逃亡が必要かといえ、彼の生前中に取った態度、つまり仕事もせず「怠惰」の中に安住していた生活に対し、彼は罰を受けなければならないという訳である。そこで彼は一案を思いついて、場所を移動することでこの女神から逃れようとするのだが、ところが引用のすぐ直前の説明では、この「移動」は復讐神から逃れることではなく、反対に彼の「唯我主義」を行使することだと言う。唯我論とは自分の自我こそが世界を形成するものであって、他者は自己の反映にすぎないとするものである。そうすると、自分こそ世界の源泉であると主張する人物が、なぜ復讐を受けることになり、かつそれから逃亡しなければならないのか。ここには矛盾が生じるが、ベラックワが唯我主義を思いついたのは彼の若い時期のことであって、死後、煉獄前域に移ってからは、この目的もなく「動き回ること」は、彼のアイデンティティの喪失を意味するものへと逆転したのである。

復讐の女神から逃亡しようとする人間は、絶えず場所を移動して、自分の居場所を気付かれないようにする。彼は居場所を変えるだけで復讐神から逃れられると考えるかもしれないが、それは一時的なことで、次の瞬間には復讐の予感が襲ってくる。彼には目的地の選定を行うだけの余裕はないであろう。もし可能なら、場所の移動どころか、彼自身の名前を変えて、更には彼自身のアイデンティティも放棄してしまおうと考えるであろう。これが追跡をかわそうとする者の執念である。逃亡を企てる人間は彼自身を生き延びさせなければならないが、だからといって彼自身の自我まで堅守する必要はない。彼には自らのアイデンティティを捨ててで

も、復讐神から逃れることが自らに課した掟である。

『並には勝る女たちの夢』のベラックワは、「真のベラックワ」なる人物は存在せず、彼自身のアイデンティティから解放されることを願った。このアイデンティティの放棄が一つの理由として、彼の逃亡者としての宿命から来ているとすれば、もう一つに、彼の無関心や怠惰を正当化するためにも、アイデンティティというような個別のレッテルなど不必要と考えたことから来ているであろう。現実世界からの自由を欲する人間は、また自分自身の自我からの自由も欲するのである。

### 三、無の発生

汽車に乗ったとき、目的地の方向に背を向けて座席に座ったワットであるが、そういうひねくれ根性の者でもついに目的地の駅に着いて、雇い主のノット氏の屋敷に到着できた。そこでの仕事はノット氏の食事を作ることが主な内容であることを、前任者のアルセーヌから説明を受けた後日、ワットはピアノの調律にやって来たゴール親子を迎えることになる。息子の方が主に調律や修理の仕事を行い、ピアノも寿命に近いなどと話をし、この訪問は無事に済んだ。ところが、ワットにとってはこの調律師の来訪がこれ一回だけのことに終らず、彼の頭の中で何度も反復されるのであった。彼にとっては特別このゴール親子のことに限って、それが何度も想起されるという訳ではなく、起こった出来事の全てがイメージの中で反復されると言う。なぜそのような現象が起こるのかの説明はなされず、この調律師のことが一つの例として記述されている。

こうして音楽室でのゴール親子の場面は、たちまちワットにとって調律のピアノとか、家族や職業上の曖昧な関係とか、何とか聞き取れる程度の言葉のやり取りとか、そういったことを意味するものではなくなった。そうではなく、そうしたことがかつて起こったとしてだが、その場面は物体と光との対話、運動と静止との対話、音と沈黙との対話、そして対話間どうしでの対話のほんの一例となった。<sup>16)</sup>

ワットがイメージとして思い起こすものは、肝心の調律がうまく終わったとか、寿命が近いから大変だとかいうピアノの用件でもなければ、子の方が調律を主に行い、親が見ているだけなのは、親から子への技術指導のためだというような職業上の話ではなかった。彼の頭の中で反復されたのは、光や物の動き、音の響き具合というような即物的な事象に関してであった。一体ピアノ自体の調子とか、調律師の言動とかは、どうして思い出されないのだろうか。ワッ

トは人間の行為に関しては、興味を持ち合わせないのであろうか。多分、そういう一面はあるであろう。彼は他人の言動に関して、どちらかと言えば無頓着である。例えばすでに引用した例だが、道路を歩いているとき、ワットの帽子が変なふう揺れるのが気になり、一人の婦人がそれに石を投げつけると、見事に命中した。しかしワットはそれに怒りを示すこともなく、幸運な命拾いであったと受け流す。このように彼は他人の悪戯ともいえる行為に対しても、無頓着を決め込むのである。こういう性格の人物であれば、調律師のことなどすぐに忘却の彼方に消え去るのは当然のことと思えるかもしれない。しかし、思い出す対象が人間であるか物体であるかは、それが様々な場面で反復して発生するとき、人間の生活の中では重大な意味合いを帯びるであろう。

ゴール親子の出来事やその後の同じような出来事において、ワットを困惑させたのは、何が起こったのか分からないということではなかった。というのも、彼は起こったことなどに関心がなかったからである。むしろ無が起こったということ、無というものが反論の余地ない確かさで起こったということ、またそのものが彼の心の中で恐らく起こり続けたということ、[...]そして、ドアをノックしたのではないノックから、閉じるが実は閉じてはいないドアまで、頑として、一つ欠かさず、そのあらゆる局面で起こり続けたということ、しかも彼の意志と関係なく、予期せぬとき、きわめて場違いな時に起こり続けたということが分かった。<sup>17)</sup>

ワットは人間の行為については忘れてしまっている。ドアをノックしたのが、またドアを閉じたのがゴール親子であることは消されてしまい、そのたたかれた音、その閉じられた動きだけがワットの脳裏に浮上してくる。この現象を彼は「無が起こった」と言うわけであるが、この無とは現象を引き起こす人物が存在せず、事物が風に揺すられて動くような具合に作動したということになる。無とは人間の行為を欠落させた現象であると、理解することが出来よう。ただし、ワットはこの無が「反論の余地ない確かさ」で起こったと言いながら、同時にこの不可解な出来事を容認することが出来ないとも、この後で述べる。

無は起こった。確かに人間の介入なしに、物事が起こるということは有り得る。しかし、単に人間のいないところで物事が発生するというを問題にするなら、自然界の現象は幾らでもその例を提供するであろう。先にも挙げたように、風によってドアが閉じることは大いに有り得るし、ピアノにしろ人間の指が弾かなくても、猫が鍵盤の上を歩いただけで、その場にはいない人間なら、ひとりでピアノが鳴り出したと理解するであろう。人間の不在の中で事物が動き、物音が発生する。これはごく普通の現象にすぎない。だから、ワットが見聞きしたドア

の開閉やノックの音は、「無」と呼ぶほどの特殊なものではないことになる。もしこれを彼があえて無と呼ぶとすれば、それはこのように理解すべきであろう。つまり、人間の行為が最初にあった。そして後で、イメージの中で想起される時には、その人間の存在が消滅してしまい、ただ物音だけ、ただ動きだけが残っていた。だから、行為者である人間の欠落部分が、無の分け前として発生したと考えられるのである。

ワットはこの無がゴール親子の場合だけでなく、いろいろな場面で起こると言う。その中心となるものは、ワットが召使いとして働くことになった屋敷の主人、ノット氏の存在に關してである。ノット氏は初めから不思議な存在として描かれる。まず何よりも、自分の使用人の前に直接姿を現わそうとしない。彼は建物の二階で生活し、自分の家の中のどこに何があるかも分からぬかのように歩き回り、声も匂いも髪型も毎日のように変わるし、二階の調度品が上下を逆さにして置かれていることさえある。こういう奇人とも言うべき人物の食事を、ワットは作ることになる。その内容は魚、肉、チーズ、果物、パン、コーヒー、ワインなど、あらゆる食材を鍋に入れて煮込んだ雑炊のようなものである。これをノット氏はごく少量ずつ食べる。こういう隠者のような人物の生活に対して、ワットは無の存在を実感し、滞在の終り頃には、それにも好感を覚えさせる。ノット氏の生き方を、ワットはこのように認識する。

ノット氏は第一に何も必要としないことを必要とすること、第二に、彼が何も必要としないことの証明となるものを必要とすること以外には、何も必要としないのであるから、自分自身に関しては、何事をも知らなかった。だから、彼は自分を証明できる人物を必要とする。何かを知るためではない。そうではなく、自分の存在がなくならないためなのだ。<sup>18)</sup>

これはあくまでワット自身の認識である。彼は目も耳も日常的な感覚も、ひどく悪化していると言う。こういう人物の判断であるから、この認識を全て容認してしまうことは難しいであろう。ノット氏は何も必要としないとワットは判断するが、果たしてそうであろうか。ノット氏は確かに彼の生活に無頓着で、自分の家のトイレの場所さえ分からないことがある。しかし、彼が何も必要としないといっても、それは普通の生活者ほどには必要としないという程度である。実際のところ、彼は召使いに食事を作ってもらわなければならないし、衣服や住居は以前から所有していて、新たな必要性はないかもしれないが、現に使用し必要としている。収入はどうか。この問題は語られていないが、ワットが片方の靴を買うのに他人から借金をしたというような苦労話はない。それどころか、邸宅に召使いを二人も雇い入れる程には裕福である。こういう人物が、何も必要としないと言えるであろうか。確かにノット氏は物資の新たな必要性に迫られておらず、その必要がまるでないかのように生活している。日々の生活費を稼がなけ

ればならないワットから見れば、この無為な生活が何物も必要としていないように思えるであろう。リチャード・エルマンは評論『ダブリンの4人』の中で、『ドリアン・グレイの肖像』の著者オスカー・ワイルドと比較して言う。

ワイルドの作中人物たちは、本当に何も行いません。それというのも、彼らはその無為を楽しんでいるからです。ベケットの人物たちも何も行いません。というのも、どんなことも行うに値するだけの価値がないからです。恐らく、この両者の相違は小さなものとは言えないでしょう。ワイルドにとっての人生は、芸術がそこにおいて創造されるという点で正当化されます。一方ベケットでは、創造的衝動が認められるとはいえ、それは排撃される立場にあるのです。<sup>19)</sup>

ワイルドにとって、人生の無為は芸術創造のために有用である。ところがベケットの場合は、この無為が彼の小説の主要テーマになっているにもかかわらず、それは何かを生産するためではない。ベケットの登場人物が無為を希求するのは、それが精神的な思考には重要であって、人生の何たるかを考え感じ取るためである。仕事をせず、生活に追われながらも怠惰を決めこむ。これは人生の一つの生き方であって、怠惰は墮落では有り得ない。そこでは、人間本来の有り様が問われているのである。そうするとノット氏の場合、現状のままで他に何も必要としないで無為に過ごしている生活は、何の意味があるのだろうか。ワットは彼が、「何も必要としないことの証明」を必要とすると言う。なぜ、人物の無為を証明する必要があるのだろうか。この人物は隣人に、怠惰な生活を送っていると知られるだけでは不十分なのか。わざわざ召使いに証人になってもらう必要など、どこにもないであろう。

ノット氏が証人を必要とするのは、恐らくノット氏の意志ではないであろう。彼は無為な生活をし、出来る限り他人に姿を見られないようにし、そしてその無為を支える召使いを必要としているだけである。だから、彼の生活を見た召使いのワットにとっては、まるで彼が存在しないに等しい「無が起ころ」ということになる。ゴール親子がピアノの調律に来たとき、ワットには彼らの存在を消し去って、ノックの音やドアの開閉の動きだけが彼の脳裏に浮かび上がった。これを彼は無と呼んだが、ノット氏において無が起ころと言うとき、この人物はワットの追想の中から消滅してしまっているのであろうか。恐らく消滅している時もあるれば、姿の残る時もある。ワットにとって無の発生とは、ノット氏の姿の有る無しの問題以上に、そこに生存する人間が彼の理性にとって、理解可能かどうかの問題なのである。ノット氏がなぜあのように他人との接触を避け、まるで自分の家の住民でないような行動を取り、無為に毎日を過ごすのか。これが彼にとって不可解であり気に掛かる。ノット氏とは別の召使いアーサーも

体験したように、不可解そのものである謎の存在なのである。「これほど激しく謎が、その謎の不変性が心を突き抜ける場所は、どこにも、ノット氏がいる場所の他にはどこにも無かったからだ<sup>20)</sup>」と言う。

ノット氏は謎に包まれている。彼が家の中を移動するとき、そこには空虚な沈黙と闇の気配が広がる。彼は何かをするのではない。何もしないで、屋敷の中を亡霊のようにさ迷う。この気配を同じ家の中にいて感じ取る召使いのワットにとって、この人間存在をどのように理解したらよいであろうか。隠者なのか変人なのか。亡霊なのか、それとも人間性を喪失した無なのか。ワットにとってこの主人の行動は、何もをも目的としないように見える。毎日の生活の中で、彼は何を生きがいとしているのであろうか。「謎の不変性」が支配すると言う。ノット氏の生き様とは、謎であることを永遠に終決させようとしめない決意であるように受け取れる。その謎とは、無為に生きることが人間存在にとって価値あることなのか、という問題である。ワットはこの問いを自ら発することはない。彼自身はこのノット氏邸にやって来る前は、定住地を持たない浮浪者として無為に生きてきた。ただ彼はノット氏のように、住居も食事も何の努力もせずに獲得できる身分ではなかつただけである。彼は少なくともどうやってその日の飢えをしのぐのか、考えなければならなかつたであろう。どんなに怠惰とはいえ、一日の生きる糧を何とかしなければならぬ人間は、まだ活動的である。食糧確保のために、彼は考え、移動を余儀なくされるであろう。そういうワットにとって、日々の糧を心配せず屋敷内を無為にさ迷うノット氏とは、謎の亡霊として現前するのである。

ワットは、ノット氏の無とも呼べる謎の生き方を体験した。勿論、彼にノット氏と同じ生き方が許される訳ではない。彼はノット氏の生活に幻惑されている。そんなワットが自分の姿を空想する場面がある。

そこで歯ぎしりは終わる、いや続いたままだ。そして洞穴の奥深くに身をおく、願望を願望するのも止めて、恐怖を恐怖するのも止めて、あらゆる山の麓<sup>ふもと</sup>に、上る坂道、下る坂道の洞穴の奥深くに身をおく。そして自由に、ついに自由に、一瞬の間だけでも自由になり、ついに無となる。<sup>21)</sup>

ワットはいかにも浮浪者らしく、道端の洞穴に身を横たえる姿を思い描く。実は彼が通りすがりの溝で休息する場面は、すでに鉄道駅からノット邸へ向かう途中で見られた。彼は屋根のある部屋での定住に執着していない。気候が許すなら、溝であろうと洞穴であろうと、体を横たえて一夜の宿を取るであろう。放浪生活が彼の自由を保証している。休息したい時に休む、眠りたい時にその場で体を横たえる、これが一所不住の生活を選んだ者の極意なのであろう。



だから、ワットが洞穴に身を休めるとき、そこには生活への「願望」も「恐怖」も消えうせて、彼は大きい「自由」の世界にゆだねられていると感ずることができる。それはワット自身も言うように、「一瞬間だけ」かもしれない。放浪で疲労している人間が、一時の休息場所を見つける。彼はそこに横たわり、精神的な欲望や恐怖を忘れる。彼はこのとき社会的人間の拘束を解かれて、自分一人の世界に安住を覚える。しかし、この自由というものは一瞬の幻影でしかないのであろうか。

人間生活からの自由、この後に到来する理想とは何であるのか。自由を味わった者が次に経験するのは、またしても日常生活への回帰である。彼は食事を取り、働きに出なければならぬ。自由を自由のままに留める手段は、誰にもないのであろうか。ワットは言うだろう、「無となる」と。無とは自分の実在を消去して、イメージとしての存在者になるということである。ピアノ調律のゴール親子が来訪したにもかかわらず、ワットの脳裏の中で反復されたのは、この人間の実在を欠いたノックの音やドアの開閉の情景だった。ワット氏の生活はまるで彼がその家の住人でないかのように、沈黙に包まれ闇の気配に覆われていた。彼は生存者として存在する以上に、幻影としてワットに謎をもたらした。ワットはこれらの状況に対して、「無が起こった」と認識する。人間が消去されているのである。

ワットは洞穴の中で自由となり、無に姿を変える。一体、無の姿とは何であらうか。ワット氏のように幻影になることであらうか。ゴール親子のように、イメージの中で消失してしまうことであらうか。ワットは道端の洞穴で、誰にも束縛されず自由を覚える。彼が無になることは、単に自分の存在を忘却の洞窟に閉じ込めることではない。彼は自分のアイデンティティを放棄するのである。彼は生存者の欲望も恐怖も打ち捨てた。彼には彼自身であることの必要性はない。ちょうど怠惰の化身ベラックワが、無私無欲によって自分のアイデンティティから解放されることを願ったように、ワットも彼の生活者としての自己や労働者としての自己、それに放浪者としての自己という、生存者としてのあらゆる自己のアイデンティティから、自分を解き放つことを希求したのである。他人の視線から自由になり、社会の拘束から自由になるだけでは十分ではない。彼は自分自身の存在からも自由にならなければならない。自分自身のアイデンティティから自由になる、これは彼自身を無としての存在に置き換えることである。彼は目的なき存在として、名前なき浮浪者として、そして姿なき生存者として、ついには自己のアイデンティティを捨象した無の存在として、世界を遍歴することを選ぶであらう。

注

- 1) サミュエル・ベケット、『ワット』、Samuel Beckett, *Watt*, Les Éditions de Minuit, 1968, p. 7
- 2) 前掲書、p. 28
- 3) 前掲書、p. 33
- 4) 前掲書、p. 41
- 5) 『マーフィー』、Beckett, *Murphy*, Les Éditions de Minuit, 1947, p. 64
- 6) 前掲書、p. 26
- 7) 『モロイ』、Beckett, *Molloy*, Les Éditions de Minuit, 1951, p. 84
- 8) ジャン＝ポール・サルトル、『嘔吐』、Jean-Paul Sartre, *La Nausée*, *Œuvres romanesques*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1982, p. 49
- 9) 『マロウンは死ぬ』、Beckett, *Malone meurt*, Les Éditions de Minuit, 1951, p. 34
- 10) 『ワット』、*Watt*, p. 59
- 11) 『並には勝る女たちの夢』、Beckett, *Dream of Fair to middling Women*, Arcade Publishing, 1992, p. 3
- 12) 前掲書、p. 12
- 13) 前掲書、p. 192
- 14) 前掲書、p. 121
- 15) 『蹴り損の棘もうけ』、Beckett, *More Pricks than Kicks*, Faber and Faber, 2010, p. 31
- 16) 『ワット』、*Watt*, p. 73
- 17) 前掲書、p. 76
- 18) 前掲書、p. 210
- 19) リチャード・エルマン、『ダブリンの4人』、Richard Ellmann, *Four Dubliners*, George Braziller, 1982, p. 106
- 20) 『ワット』、*Watt*, p. 206
- 21) 前掲書、p. 209